清水 彊先生を偲ぶ

故 清水 彊（しみずつとむ）氏略歴：1911年生まれ．東京大学天文学科卒業．東京大学助手，建設省地理調査書技術養成所長などをへて1957年京都大学宇宙物理学教室教授，1974年定年退官．その後1983年まで仏教大学教授．この間，日本天文学会副理事長および理事長を歴任．専門は恒星天文学とくに統計星学．1999年4月24日肺炎のため逝去．

清水 彊先生が亡くなられた．私が院生となって先生の講座に所属したのは1960年代前半のことである．この講座では毎年夏休みに入ると間もなく，信州で開かれる勉強会にうち揃って出かけたものである．SAM「勉強会」（サム：Stellar Astronomy Members あるいは Meeting の略称）である．テーマを年毎に決めて，東京と京都のグループを中心に全国から数10人が集まる，日本の天文学における inter-univerity の研究の場の草分けであった．温泉場での2泊3日ほどの合宿形式であったので，所属も，専門も，世代も超えての開放的で新鮮な交流が深まる場でもあった．私の研究テーマは先生の専門から外れていたので，先生の研究指導を直接受けることはなかったが，SAMは私たち院生に様々の積極的な影響を与えた．

この「勉強会」は程なく「研究会」となり，SAMは清水先生を代表者として，銀河系・銀河の問題をひろく取り上げ，やがて東京天文台のシュミット望遠鏡計画を世界最大級のシュミット望遠鏡計画に押し上げるという重要な役割を演じた．これは，「野辺山」から「すばる」へ，さらに「LMSA」へと，大型共同利用装置計画を広範な研究者集団で検討し実現を目指すという，その後の太い流れに繋がって行く．

時期をほぼ同じくして，先生は宇宙物理学教室には40 cmシュミット望遠鏡を作られた．先生自身にはこれを使って研究をされる十分な時間はなかったが，この望遠鏡は大宇陀に移設され10年間の活躍の後，現在はリッチクレチアン望遠鏡に改造され，今も教室の基本観測装置として重要な役割を果たしている．「自前の観測データで研究をする」という当たり前の研究方法を，まだほとんどとれなかった時期から，その実現に尽くされた先生の努力は，研究そのものの発展に結びついたことはもとより，観測天文学者の育成のための基盤形成となって今に生きている．

清水先生は努力型で地味なタイプの研究者であった．SAMの代表者と言っても旗手ではなく，中堅・若手を含めたオープンな議論を促し，先生にとっては過度と感じられたかも知れない要求も容認されて，関係研究者の総意として大計画の実施を東京天文台に要請するという役割を，年長者として果たされた．同じ頃，全国的な学園民主化の嵐は宇宙物理学教室では教室運営が講座制から教室教官合議制へ移行をもたらした．このときから，縦にも横にも内にも外にも壁のない，宇宙物理教室のリベラルな今の研究制度は始まった．清水先生にとっては抵抗感の多いことであったようだが，次世代の力を信じて本人は譲られたのであろう．当時の京都の同世代3教授のそれぞれのありようを思うと，先生の寛容さが教室にもたらしたものは大きい．

宇宙物理学教室を停年退官されてちょうど4半世紀となり，先生を直接知るものは教室にさえ少ない．しかし，先生の考えとそれに基づく節目節目における振る舞いの結果を，空気のようにほとんど意識をしない研究の基盤として，今の世代は享受している．先生が後進に残されたものをここにあらためて確かめ，謹んでご冥福を祈るものである．

大谷 浩（京都大学宇宙物理学教室）